

「安倍一強」崩したマグマ

五十嵐 仁（法政大学名誉教授・法政大学大原社会問題研究所前教授）

〔以下の談話は、『東京民報』第1994号、2017年7月9日付に掲載されたものです。〕

安倍首相に対し、マグマのようにたまっていた都民の怒りが爆発したような選挙結果でした。自民党として過去最低だった38議席以下だけでも「歴史的敗北」なのに、それをさらに15も下回り、底が抜けたような大敗北です。

「森友」「加計」疑惑にふたをしたままの共謀罪の強行採決、その後も相次いだ議員や首相側近の不祥事に暴言、疑惑隠しなどがありました。都民は「政権の中樞が腐っているのではないか」「首相を信用していいのか」と不信を抱きました。「信なくば立たず」という政治の土台が揺らいだ。これが地殻変動のような惨敗につながりました。

都民ファーストの会は、こうした不信や「反自民」の手ごころな受け皿となって躍進しました。ただ、ポピュリズム選挙のような強い「追い風」に乗って当選した新人議員が、大阪や名古屋で当選した議員のようにスキャンダルを起こさないか、知事へのチェック機能が果たせるのか、有権者の点検や監視が必要です。

共産党はマスコミが現状維持も難しいと予測するなかで、議席を伸ばしました。ポピュリズム選挙の嵐の中でも、立憲野党が健闘できることを示したといえます。

「安倍一強」の潮目が変わったことがはっきりと示されたことは、市民と野党の共闘にとって大きな励みになります。市民と野党の共闘を強め、早く解散・総選挙を勝ち取ることが今後の課題でしょう。